

縫はずに着る洋服

東京女子高等師範學校教諭兼教授

石井庄司

一
常陸風土記の久慈の郡の條に、左のやうな記事が見える。
郡の東七里、太田の郷に、長幡部の社あり。古老の曰へ
らく、珠寶美萬の命、天より降りまし、時、御服を織ら
む爲に、從ひて降りし神の名は、綺日女の命、本、筑紫
の國の日向の二神の峰より、三野の國の引津根の丘に至
りき。後、美麻貴の天皇の世に及び、長幡部の遠つ祖、
多立の命、三野より避けて、久慈に遷り、機殿を造り立
て、初めて織りき。その織れる服、自ら衣裳と成り、
更に裁ち縫ふことなし。これを内幡といふ。或るもの曰
へらく、繩を織る時に當りて、輒く人の見るが故に、屋の
扉を閉ぢ、内を闇くして織る。よりにて鳥織と名づく。強
き兵、利き劍も裁ち斷ることを得ず。今年毎に、別に神
の調として獻納れり。(武田祐吉編風土記に據る)
太田の郷は、今も太田町といひ、西山莊の東にあたるこ
ころである。此の村の東幡村に長幡部神社といふのがあ
り、祭神は大幡主神といふ。「珠寶美萬命」は皇孫瓊瓊杵の尊

の事で、所謂天孫降臨の際に、御服を織るために、天降り
給うた神は綺日女命といつたといふ。もこは筑紫日向の高
千穂の二上峰においてになつたが、後に美濃國の引津根の
丘にお遷りになり、美麻貴の天皇即ち崇神天皇の世に至つ
て、長幡部の遠い祖であるところの多立の命が美濃から此
の久慈郡にお遷りになつた。機殿を造つて初めて織つたこ
ころが、その織つたものは自然に衣裳となり、一向裁縫の
必要がない。之を内幡と云つた。裁縫をしないで衣裳に
なるやうに織つた布といふことである。此處までが古老の
言葉である。更に或る者がいふには、繩を織る時になつて、
容易に人が見るので、家の戸を閉めて眞闇にして織つた。
それで鳥織又はクロオリといつた。如何なる強い兵士でも
またよく切れる劍でも、其の布を裁ち切るこゝが出来ない
と言ふ。洵に不思議な、神祕的な布である。

さて此の傳説で注意されるのは

(一)織つた布が自然に衣裳になること。

(二)闇がりで織つた布が、強兵・利劍によつても斷ち切る

こゝが出来ない。

こゝいふ事の二つである。一つでも面白いが、二つも條件が適つてゐるので、よいお話の種こゝいふこゝが出来よう。さて之をさう話してみるか。

二

或るころに、花子さんこゝいふ女の子がゐりました。

花子さんのお母さんは、すつこ前からお身體が悪くて、ねていらつしやいました。けれども花子さんは、大變お伶俐で、なんでも自分でいたしました。

朝起きるこゝ、自分できれいにお顔を洗ひました。御飯も自分一人でした。それからかはいゝエプロンをかけて、小さいカバンを提げて、ねえやさんこゝ一所に幼稚園へ行きました。

幼稚園から歸つて来るこゝ、

「お母さま、只今！」

こゝ元氣よく、お母さんのおやすみになつてゐるお部屋へ出かけて、いろくゝ面白いお話をいたしました。また幼稚園でお習ひしたお唱歌をうたひました。

ムスンデ、ヒライテ、

テチウツテ、ムスンデ……

こゝいふかはいゝお遊戯も一人でして、お目にかかけました。お母さんはいつもお母さんが歸つて来るのを待つていらつ

しやいました。そして、おやつにおいしいお菓子を下さいました。

花子さんは、お菓子をいたゞいても、自分一人なので、いつもさびしそうにしてゐました。

「お母さまが、早く、お起きになればいいがな」
こ考へてゐました。

その中に、花子さんの幼稚園では、遠足に出かけるこゝになりました。みなさんは、かはいゝ洋服を着て、赤い帽子をかぶり、リボンの附いたお靴をはいていらつしやいます。花子さんも、かはいゝ青い洋服を着て行きたいなと思ひました。けれどもお母さんは、御病氣ですから、お頼みするこゝが出来ません。いつもの古い洋服を着て

「つまらないな」

こ思ひました。けれども、花子さんはもうそんなこゝはすぐに忘れて、いつものやうに元氣よく遠足に出かけて行きました。

花子さんは、お宮の前を通るこゝには、きつこていねいにお辭儀をいたします。今日も帽子をさつてお辭儀をいたしました。

静かなお宮の森では、小鳥がたのしさにビイチクビイチクないてゐます。その小鳥の聲こゝ一所に、なんだかギートントンギートントンこゝいふ音がきこえて來ます。なんだ

らうと思つて、森の中へ入つて行きました。すると、見た
こともないやうな、美しいお姉さまがギートントンと機を
織つていらつしやいました。そして花子さんの方を向いて、
にこ／＼しながら

「花子さん、今日の遠足に、あなたは、どんな洋服で行き
ますか。赤いのがいいですか、青いのがいいですか」

とおつしやいました。

花子さんは、びつくりして、眼をバチクリさせてるま
す、またその方は、

「これは、花子さんのお洋服にしようと思つて織つてゐる
のですよ」

とおつしやいました。そして機からお取りになるさ、縫
はないのにそれがちやんこ洋服に仕立てゝありました。

そこで花子さんは、青い洋服を着せていただいて、よろ
こんで遠足に出かけました。

それから、この洋服は、みんなに引つぱつても、釘にひ
つかけても、少しも破れませんでした。ほんまに、つよく
てかはいゝ洋服です。

(一九頁より)

する工夫を勵し、才智藝能なきは、その生得の器用に
したがつてをしへ成べし。或人の曰、三教皆明德を明か
にする教なるに、儒道の心學さのみ承はれば、かたむ
きなるやうにきこえ候は如何。曰、もさより三教も
に、明德を明らかにするをしへなれども、仙佛の二教は
その法世間に便り悪く、その上工夫取入がたき所あり。
儒教は世間の日用にたよりよく、その工夫取入きはめて
やすきゆへに、世間通用のためなれば、儒道の心學さの
み論ずるなり。ひがめる私言にはあらず。」

(昭和十四年五月十四日)